

“幸亏”“幸好”をめぐって

——コミュニケーションと認知の視点から——

曹 泰 和

0. はじめに

《現代汉语八百词》(1996)によると、“幸亏”とは、“指由于某种有利条件而避免不良后果。一般用在主语前。幸好：同‘幸亏’”と記述されている。

《現代汉语虚词辞典》(1998)では、“幸亏：(幸 幸好 幸而)表示幸运地得到免除不良后果的有利条件，后一分句中多有‘才’。表示由于有了‘幸亏’指出的有利条件，从而避免了本来会出现的后果。‘才’后多跟否定形式。后一分句中有‘否则、不然、要不’。表示如果没有‘幸亏’指出的有利条件，后果将不可避免。幸好：跟‘幸亏’相同，用于口语。‘幸好’后可以有停顿。”と記述している。

このように、“幸亏”と“幸好”については、文体の違いしか指摘されていない。しかし、筆者の語感では、“幸亏”を含む節の後には「逆接」的表現が続く場合が多く、“幸好”の後には「順接」が続く場合が多い。従って、“幸亏”と“幸好”には、ニュアンス、用法などに違いがあるように思われる。以下に例をあげる。(以下の例文はインターネットに載っている現代中国語の小説から検索した例に多少手を加えたものがほとんどであるが、自作のものもいくつかある。)

- 1) 搬完家满头大汗，幸亏小王家有洗澡间。(要不真受不了。)
- 1') 搬完家满头大汗，幸亏小王家有洗澡间，就去冲了个凉水澡。(要不真受不了。)
- 2) 搬完家满头大汗，幸好小王家有洗澡间，要不真受不了。

2”) 搬完家满头大汗, 幸好小王家有洗澡间, 就去冲了个凉水澡。

例1と1’の最後の括弧の中をご覧いただきたい。ここには、言語化されてはいないが言外に含まれていると思われることばを示している。このように、“幸亏”を用いる場合は、“要不真受不了”のような文の存在が感じられる。これを逆説の反事実文(「もし～でなければ、～になる」)と呼んでおく。ところが、“幸好”を用いる場合は、反事実文が言語化されなければ、例2)の反事実文の想定(assumption)¹(点線に囲まれている部分)を想起しにくいと思われる。例2”)の場合も、反事実の“要不真受不了”のような想定をしにくい。

なぜ、“幸亏”を用いる場合は、聞き手の反事実の想定がしやすく、“幸好”を用いる場合は反事実の想定がしにくいのか。このような疑問について、本稿はコミュニケーションと認知の観点から、解釈を与えてみたいと思う。さらに、コミュニケーションと認知の観点に立ち、“幸亏”“幸好”における伝達が、いかに達成されるか、それぞれの使用分布を通して考察し、この2語の区別を明らかにしたい。

1 “幸亏”と“幸好”の違いがあまり見られない文脈

1.1 反事実条件文が明示的で想定しやすい場合

① “要不”“否则”“不然”のような逆接と共起する場合：

- 1) 幸亏(幸好)你提醒我, 要不我就忘了。
- 2) 幸亏(幸好)星期六向来没什么重要的课程, 否则连与朋友约会的时间都没有。
- 3) 幸亏(幸好)眼镜没摔在地上, 不然她真的就要摸黑回家了。

② “如果”“要是”“假如”と共起する場合：

- 4) 幸亏(幸好)那时分手。如果拖到现在, 那我会更伤心。
- 5) 幸亏(幸好)你来得及时, 要是再晚一点就赶不上了。

③ “才”と共起する場合：

- 6) 幸亏(幸好)司机发现得早, 才没出车祸。
- 7) 幸亏(幸好)遇上了解放军, 我们才找回了旅馆。

“幸亏”“幸好”をめぐって

④直前の状況によって導かれた“幸亏”“幸好”の場合

- 8) 他俩差一点就打起来了。幸亏(幸好)老王赶来,总算平了一场风波。
- 9) 这种鬼天气,不迷路才怪呢。……幸亏(幸好)大路两边载着一株株柳树,走在两行柳树中间总不会迷路的。

①と②の場合は、反事実条件文は言語化され、コードモデルで提示したような伝達が達成できる。コードモデルとは、Shannon & Weaver (1949) によって示されている通信工学的なコミュニケーションモデルである。人間の言語伝達がそれに基づいて解釈されている。コードモデルによるコミュニケーションは、送り手からメッセージを送り、受け手がそれを解読することにより達成される。理解の過程は記号解読の過程である。すなわち、聞き手が推論を行わなくても、文字通りの解読を通して、話し手の発話が解釈できる。①と③では、反事実条件文が言語化されているため、聞き手は文字通りの解釈をさえ行えば、伝達の達成が実現できる。

③の“才”と共起する場合は、反事実条件文が言語化されていないが、反事実の想定が演繹的推理によって得られる。すなわち、「PだからこそQである」の文脈から、「PでなければQでなかった」を推論することができる。

- 6) 幸亏(幸好)司机发现得早,才没出车祸。(P→Q)
- 6') 如果司机发现得晚,肯定会出车祸。(∼P→∼Q)

④の場合においては、“幸亏”“幸好”により導かれたよい条件がなければ、悪い結果になるということを、“幸亏”“幸好”を用いる直前の状況によって明示的に示されているので、聞き手にとってその発話から反事実の想定を比較的容易に呼び起こすことができる。まとめて見ると、以上のような文では、話し手の意図が明示的なものであるため、反事実条件文との関わりが強いことが聞き手にとって無理なく想定できるような文脈である。

1.2 聞き手の思い描く文脈によって解釈が異なる場合

- 10) 幸亏(幸好)把身份证带来了。(要不就办不成图书卡了)
- 11) 没想到要在路上打电话,幸亏(幸好)身上带着零钱。(要不还真没法打)

Sperber & Wilson (以下 S&W と略す) によって提唱された関連性理論によれば、「発話がいかに理解されるかということに関する理論」(S & W, 1993) 人間は効率的な情報処理装置である。その効率性の一つとしては、人間は自動的に「関連性のある」情報を選ぶことである。たとえば、S&W は「ガスのにおいがする場合」の例をあげた。a) 家のどこかでガス漏れがしている。b) ガス会社はストライキをしていない。この二つの想定については、a) の方は関連性が大きく、想定しやすい。b) の方は想定しにくい、と指摘している。さらに、S&W は、「関連性のある」情報を選ぶ際に、個人個人で違い、ある人にとっては顕在的 (manifest) な存在であっても、ほかの人にとって非顕在的な存在であるかもしれない。たとえば、赤ちゃんの泣き声は、わずかにしか聞こえなくても、その子の両親はほかの人より先に気がつく。(S&W1993 参照)

この関連性理論に基づき、例 10) を見てみよう。発話の背景を話し手が図書館で図書カードを申し込もうとする場面と仮定しよう。そうすると、話し手の“幸亏把身份证带来了。”という発話を解釈するには、聞き手は「“图书卡”を作るのに“身份证”が必要である」という背景知識さえあれば、“没有身份证就办不成图书卡”という反事実の想定を補う事が無理のない、労力のかからないことであろう。すなわち、場面が特定されることにより、聞き手の想定のある関連性のある方向 (例えば、図書カードと結びつく方向) へ導き、その想定をはっきりとした形にさせる。これは、“幸好”に置き換えても、同じ事が言える。

しかし、場面という要素は、あくまでも聞き手が発話の解釈をする際に、想定を導き出すことを助ける手がかりにすぎず、根本的な要素ではない。“没有身份证就办不成图书卡”と“没有零钱就打不成电话”の想定を呼び出すかどうかについては、聞き手個人が持っている背景知識に依存する。例 11) からみると、もし聞き手は「小銭がなくても、カードで電話を掛けられる」という文脈 (背景知識) を思い描いたとすれば、「小銭がなければ、電話を掛けられない」のような反事実の想定を呼び起こさないであろう。すなわち、反事実の想定が起こるかどうかは、聞き手がどのような文脈を思い描いたか、すなわちど

“幸亏”“幸好”をめぐって

のような背景知識を持っているかに依存する。これは、“幸好”に言い換えても、同じことが言えることから、“幸亏”“幸好”の語彙レベルの違いとはあまり関係がないと思われる。

2 “幸亏”と“幸好”の違いが見られる文脈

① “幸亏”の例文からみる場合

- 12) 我的脸在黑暗下有些发红，幸亏（幸好）是黑天，不大看出来。
- 13) 房里的空气寂静得仿佛房间里一无所有，幸亏（幸好）还有点儿酒味。

② “幸好”の例文からみる場合

- 14) 维中拉哲朗去吃烤肉，硬要请客，哲朗随他。想想论文这副惨状，是该慰劳慰劳的。幸好（幸亏）有维中这个好友，他心想。
- 15) 我们就在公共汽车里来找吧。（找要描写的模特）幸好（幸亏）这辆车不挤，人人都有坐位。
- 16) 保姆看到小林和小林老婆吵架，已经习惯了，就象没看见一样，……
…小林已做好破碗破摔的准备，幸好（幸亏）这时有人敲门。大家便都不吱声了。
- 17) 我想单独和她聊聊，就在公司门口等她，她出来了。幸好（幸亏）没有同伴。
- 18) 她要我买的東西昨天在百貨大樓幸好（幸亏）碰上了。

上記のような“幸亏”の例文においても、“幸好”の例文においても、反事実の想定を呼び起こしにくいことが、われわれの直感から分かる。それはなぜであろうか、これを解くのに、認知的な視点から分析する関連性理論から理由を探りたいと思う。

関連性理論によれば、人間は自動的に最も顕在的と思われるものに注意を払う。“幸亏”“幸好”により導かれた「よい条件」あるいは「よい結果」の部分が明示的に示されているので、聞き手に注意を働きかけることになる。一方、「よい条件がなければ、悪い結果になっていた」という部分が明示されていないので、聞き手が注意を払わないのが、一般的な認知的傾向である。もし、話

し手が明示されていない部分を意図しようとするならば、聞き手に何らかの手がかりを提示しなければならない。例えば、(15)の例を少し変えよう。

15') 我们描写模特的时候一定要坐着才行, 幸好(幸亏)这辆车不挤, 人人都有坐位。

このように、“我们描写模特的时候一定要坐着才行”の状況を入れると、聞き手は“如果车挤的话, 就没办法描写模特了。”の反事実の文を呼び起こしやすくなる。

聞き手はある特定の想定を呼び起こすために、その特定の想定以外の想定を排除しなければならない。伝達とは、話し手と聞き手の共同作業なので、話し手によって提供された想定が狭ければ狭いほど、想定を特定しやすい。もう一度(15)の例を見ると、話し手により提供された情報は聞き手にとって選択の幅のある情報であることが分かる。具体的に言うと、電車が込んでいないことは、モデルを描写するには便利を与えたが、電車が空いてなければ、モデルを描写することができないということではない、つまりその「よい条件」とは「唯一の条件」ではないということである。

さらに、反事実を想定するかどうかを決定する大事な要素は、想定する情報の必要性に依存する。人間は情報を処理する際に「価値のない」情報に関心を持たない傾向にあるからである。例12)から18)を見ると、もし、話し手も聞き手も関心を持つものは「よい条件」あるいは「よい結果」であるのならば、わざわざ「悪い条件」あるいは「悪い結果」を想定する必要がなくなるであろう。

“幸亏”と“幸好”を「よい条件」があって「よい結果」になったという順接の文脈中に置かれる場合は、両方とも反事実を呼び起こしにくくなるという点では、共通性が見られる。しかし、そこに多少の相違も感じられる。多少の相違というのは、“幸亏”の文を“幸好”に置き換えるとより一層反事実の想定を呼び起こしにくくなるという点である。逆に、“幸好”の文を“幸亏”に置き換えると、反事実の想定を呼び起こしやすくなる。(次章で詳しく検証する。)つまり、話し手の反事実の意図が曖昧な時に、語彙レベルの違いが浮き

彫りとなると考えられる。関連性理論を用いて、“幸亏”あるいは“幸好”は、なぜ置かれる文脈によって、反事実を想起する度合いが違ふかということについての解釈ができる。しかし、なぜ、同じ文脈なのに、この2語を入れ替えると、反事実を想定する度合いが変わるかについての解釈ができない。これを説明するには、この2語の使用分布をまず見なければならぬ。

3. “幸亏”“幸好”における使用分布

3.1 “幸亏”の使用分布

“幸亏”を用いる41の例文から次のような分布状況が見られた。

- a) “要不”“否则”“不然”のような逆接と共起する場合は、41例の内16例があり、39.0%を占めている。
- b) “如果”“要是”“假如”と共起する例文の割合は、41例の内5例があり、12.2%である。
- c) “才”と共起する例文は、41例の内2例があり、4.9%である。
- d) 直前の発話によって導かれた“幸亏”の例は、41例の内17例があり、41.5%である。
- e) 順接の例は41例の内2例があり、4.9%である。

以上のような“幸亏”の使用分布から明らかなことは、“幸亏”と反事実条件文の関わりが大きいことである。順接の例を除いて、9割以上の例文は「もし“幸亏”により導かれた「よい条件」がなければ、「悪い結果」になった。」という発話意図が伝達されている。では、語彙の使用状況と語彙の意味の間はどのような関係を持つのかを考えてみよう。L. Wittgenstein (1953)によれば、「語の意味とは、言語内におけるその慣用である」(橋本1997)。橋本(1997)はさらに、「ことばの意味とは、当の言語(日本語や英語)においてそのことばがどのように使い慣わされているか(=慣用)である」と説明している。

“幸亏”を用いる9割の文は「よい条件がなければ、悪い結果になっていた」という意味の文であることから、このような使い方が“幸亏”における慣用的な使い方と言えよう。そして、この慣用的な使い方から、“幸亏”の基本義

が形成されたと考えられる。従って、反事実が言語化されなくても、反事実を想起しやすい理由は、“幸亏”の語彙的意味の中に反事実の意味が含まれているからと考えられる。

3.2 “幸好”の使用分布

“幸好”の使用分布について、55例を調べた結果は以下の通りである。

- f) “要不”“否则”“不然”のような逆接と共起する場合は、44例の内6例があり、13.6%を占めている。
- g) “如果”“要是”“假如”と共起する例文の割合は、44例の内2例があり、4.5%である。
- h) “才”と共起する例文は、44例の内2例があり、4.5%である。
- i) 直前の発話によって導かれた“幸好”の例は、44例の内4例があり、9.0%である。
- j) 順接の例は44例の内30例があり、68.2%である。

上記の結果から観察されたもっとも顕著な特徴は“幸好”は「よい条件」によって「よい結果」をもたらしたという順接の文によく用いられることである。そして、反事実との関わりがそれほど強くないことも分かった。さらに、考察の結果は、“幸好”は“突然、马上、及时、立刻、快、早、这时”などのような時間副詞、時間名詞とよく共起すること、また、“遇、碰、撞、摔、滚、砸、看（了一眼）”のような瞬間動詞と共起することが見られた。以下に例をあげよう。

19) 幸好司机发现的早，立即刹车，才没出事儿。

20) 幸好突然想起来，“你来了多久？”

21) 真是千钧一发，幸好没撞上。

22) 我这样想匆匆看一眼先生怀中的玉云，幸好她双眼紧闭……。

筆者は“幸好”が偶然性のある出来事との共起頻度がどれほどあるのかを統計してみた。その結果、44例の内27例があり、61.3%を占めていることが分かった。

以上のような使用分布から、“幸好”の慣用的な使い方は、「順接の文に用

“幸亏”“幸好”をめぐって

い、それが偶然性が高い出来事を表す」という用法である。さらに、このような典型的な用法から“幸好”の基本義を得ることができる。すなわち、“幸好”は、「よい結果」をもたらす「よい条件」を導く。また、偶然性の高い出来事と共起することにより、「運がよかった」という気持ちを表す。さらに、“幸亏”との違いとして、反事実との関わりがそれほど強くないという点も指摘できる。

4. 統語的用法における“幸亏”“幸好”の相違点

4.1 “幸亏”は名詞を修飾することができる：

23) (如果没有他, 我们就得四处奔走, 图谋生计, 那乞不成了乞丐集团?
……小陈也回敬过来: “也幸亏 (*幸好) 你, 才使我们生活正常。”

24) 幸亏 (? 幸好) 这场雨, 庄稼才没有旱在地里。

“幸好”は名詞を修飾することができない。23) の例は“幸好”に置き替えられない。

しかし、例 24) の場合はもし“幸亏这场雨”の文を“幸亏下了这场雨”の省略として考えるならば、“幸好”に置き替えることができる。

4.2 “幸好”は“中顿”の挿入的使い方がある：

25) 我将他搬到一旁, ……幸好 (*幸亏), 他比我想象的轻多了, 几乎是稻草人。

26) 我也顾虑到其它的可能啊, 幸好 (*幸亏), 一切判断正确。

“幸亏”にはこのような統語的用法がないので、25) と 26) の例を“幸亏”に置き替えられない。しかし、ポーズを取ってしまえば、“幸亏”の使用が容認される。

25') 我将他搬到一旁, ……幸亏他比我想象的轻多了, 几乎是稻草人。

26') 我也顾虑到其它的可能啊, 幸亏一切判断正确。

5. コミュニケーション視点からの再検討

3.1 と 3.2 でまとめた“幸亏”“幸好”の慣用的用法から分かるように、“幸

“幸亏”により導かれた「よい条件」のほとんどは、「悪い結果」を免れることのできる条件であるため、その条件についての話し手の「ありがたさ」の気持ちが強く現れる。それに比べて、“幸好”の慣用的用法は「よい結果」をもたらす「よい条件」を導き、その「よい条件」と「悪い結果」が必ずしも結びつかない点から見ると、話し手の「ありがたさ」の気持ちがやや薄いと考えられる。また、3.2で見てきたように、“幸好”はよく偶然性の高い出来事と共起するため、「たまたま」のニュアンスを持っている。従って、「感謝文」に用いる場合は、“幸亏”は“幸好”より、「よい条件」に対しての評価が高く、感謝の気持ちもより強く伝わる。

27) 幸亏 (△幸好) 你帮我修好了电脑, 不然我就得送到修理店去了。

28) 前几天我的自行车丢了, 幸亏 (△幸好) 朋友帮忙找回来了。

29) 幸亏 (△幸好) 您拉了我一把, 要不我非掉下去不可。

30) 玩具厂有位员工突发急病。半夜三更很难找到车, 幸亏 (△幸好) 一位司机帮助, 将病人送到医院。

“幸好”の前に付けた“△”は、“幸好”に置き替えても非文になることはないということの意味している。すなわち、あくまでもどちらがより「適切か」という問題で、“幸亏”を用いたほうが、コミュニケーションの場で、話し手の感謝の気持ちを強く伝達し、より円滑なコミュニケーションを果たすことができる。

6. 結び

本稿では“幸亏”“幸好”を用いる際に、われわれが直感的に感じている反事実との関わりに関する語感の差がなぜ生じるのかについて、コミュニケーションと認知の観点から、その解釈を探ってみた。考察して分かったことは、“幸亏”“幸好”を話し手の反事実の発話意図が明示的な文脈に用いている場合は、互いの語彙の差があまり感じられない。しかし、話し手の反事実の含意が曖昧な場合は、語彙的意味の差が多少感じられる。その原因を探るために、それぞれの使用分布を見てきた。そして、慣用的な用法を見つけることにより、

“幸亏”“幸好”をめぐって

この2語における基本義が得られた。以上により、“幸亏”と“幸好”における共通点と相違点が浮き彫りとなったと思う。しかし、今回の研究は、関連性理論の不十分なところを指摘するまでには至らなかった。今後、関連性理論、またその他の認知的理論についての理解を深めながら、言語は話し手の立場から見て、いかにして伝達されているのか。そして、聞き手の立場から見て、いかにして解釈されているのか。また、伝達されたことばは、話し手のどんな気持ちや態度を表しているのかといった問題について、更に研究を深めたいと思う。

注

- 1) 想定：関連性理論によると、構造化された概念の集合のこと。

参考文献：

- 呂叔湘主编 1996.『現代汉语八百词』商务印书馆出版
候学超 编 1998.『現代汉语虚词词典』北京大学出版社
スペルベル、D. ウィルソン、D. 1993.『関連性理論 -伝達と認知-』
研究者出版
Leech, G. N. 1983. Principles of Pragmatics. Longman, London. 池上嘉彦・
河上誓作 訳 1987. 『語用論』 紀伊国屋
田窪行則編 1997.『視点と言語行動』くろしお出版
田窪行則編 1992.「メンタルスペース理論」.『言語』21 - 12 (1992年・11月号)
54 - 60.
田窪行則編 1993.「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」
『日本語の条件表現』益岡隆志編 くろしお出版
小泉保 1990.『言外の言語学』-日本語語用論- 三省堂
小泉保 1995.『言語学とコミュニケーション』 大学書林
坂原茂 1985.『日常言語の推論』 東京大学出版会

坂原 茂 1993. 「条件文の語用論」 『日本語の条件表現』 益岡隆志編

くろしお出版

米沢久美子 1998. 「ほめ言葉の意図—イメージの共有をめざして—」 修士論文

橋本良明編 1997. 『コミュニケーション学への招待』 大修館書店

[后记]

这篇论文是以在244中文发表会上的纲要为基础加以修改写成的。曾受到相原茂导师的耐心指导，以及杨凯荣老师，鲁晓琨老师的热情指正，在此深表谢意。